

平成25年度 校内研修計画

1 研究主題

きき合い 学び合い 支え合う 協同的な学び

2 主題設定の理由

昨年度から、中学校において新学習指導要領による教育課程が完全実施された。今回の改訂では、「生きる力」の理念が引き継がれ、「基礎的・基本的な知識・技能の習得」「思考力・判断力・表現力等の育成」等のいわゆる「習得・活用・探究型学習」の充実が強調されている。また、「教育内容に関する主な改善事項」では、とりわけ「言語活動の充実」を重視している。

沖縄県教育委員会は、「生きる力」の重要な要素である「確かな学力」の向上と「基本的な生活習慣の形成」について課題があることを明らかにした。

本校は、「きき合い 学び合い 支え合う 美しい学校」を本年度の教育目標に掲げ、全教育活動を通して「続けたい授業改善と校内研修」と「ケアリングによる『きき合う学級』づくり」を両輪とした学校づくりを目指している。様々な「人・モノ・こと」とのかかわりの中で「三つの対話」（「教材との対話」「他人との対話」「自己との対話」）が三位一体となった協同的な学びにより、生徒一人ひとりの学びを保障し、「確かな学力」の向上を目指したい。また、「三つの対話」を通じた「学び合う学び」により、「言語活動の充実」や本県が目指す「なりたい自分」「なれる自分」を広げ、「学習意欲の向上」や「キャリア教育の視点を踏まえた『確かな学力』の向上」につながると考える。

なお、中央教育審議会は、「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」（2010年3月）の中で、従来の「技能・表現」では「技能を表現すること」であったものを、今回は「思考・判断したことを表現すること」と改められ、「活用型」学力を評価する視点を明確にした。さらには、このように「表現」したものの（「活用型」学力）を評価する方法として、「パフォーマンス評価」を推奨している。

さて、本校の実態を見てみると、自分の考えを持っているのに遠慮して話さなかったり、分からないのに仲間に「教えて」と言えない生徒がまだ多い。「対話と協同のある学び」の基盤となるのは、「聴き合う関係」である。互いに「聴き合う関係、ケアし合える関係、安心して学べる関係」ができたときに、初めて深い思考や学びが生まれる。生徒の考えから出発する学びへの授業改善には、「聴き合う学級づくり」が欠かせない。

また、授業改善を成功させるためには、教師同士が専門性を磨き合い、働く仲間として協力し合う「同僚性」を高める必要がある。そのために、すべての教師が授業を公開し合い、授業リフレクション（研究協議）でお互いを磨き合うことを繰り返す。教師の同僚性を高めることで、何でも話し合え、相談し合えるような居心地のいい職場（学校）となり、多忙感も軽減できる。そうした環境を創るためには、教師に時間的・精神的なゆとりを与える必要があり、週時程や学校行事・会議等を見直し、工夫・改善を図る必要がある。

なお、保護者や地域住民に授業を積極的に公開し、授業や行事等への参加や学校運営（学校評価）への参画を促進することにより、「地域教育資源」を活用した授業改善や学校改革に生かしたい。

3 研究内容

- (1) すべての教師が各教科等の授業で「聴き合う学級づくり」に取り組むことにより、「対話と協同のある学び」の基盤となる「聴き合う関係、ケアし合える関係、安心して学べる関係」を構築する。
- (2) 「三つの対話」（「教材との対話」「他人との対話」「自己との対話」）が三位一体となった協同的な学びを構築することにより、「習得・活用・探究型学習」及び「言語活動」の充実や「キャリア教育の視点を踏まえた『確かな学力』の向上」につなげる。
- (3) 思考力・判断力・表現力を育む授業づくりをするために、パフォーマンス評価（伝統的な客観

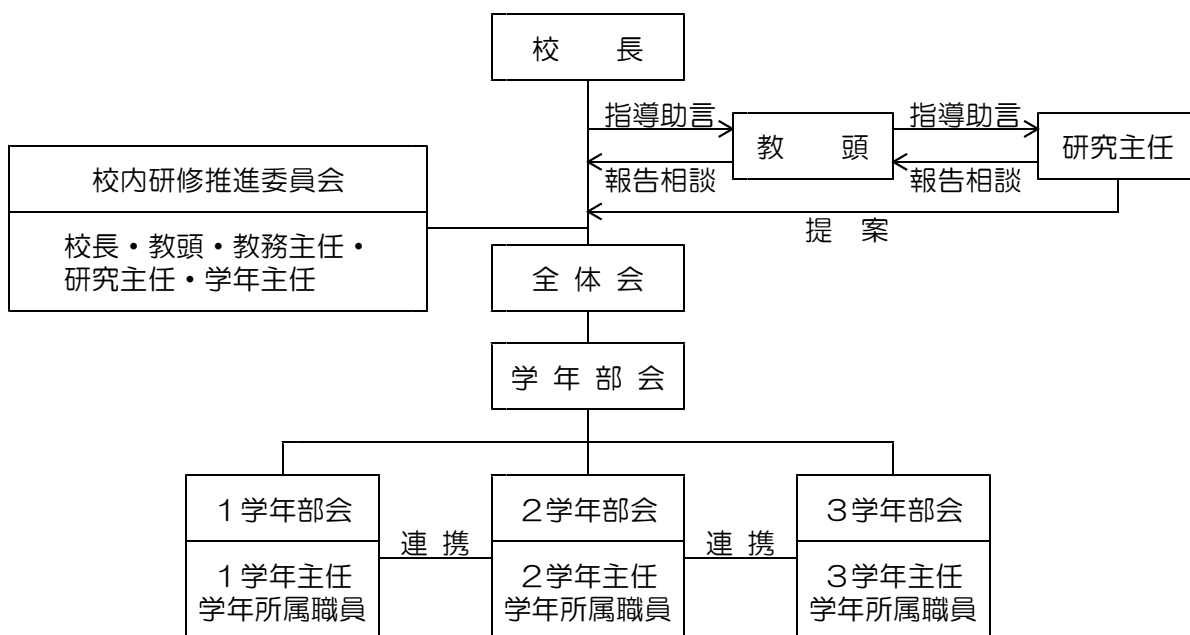
テストで評価される学力の様相には限界があることへの反省から、学力を総合的に評価するために近年登場した評価法。観察や対話、自由記述、実技を含めて、パフォーマンス(表現活動や表現物)をもとに評価する方法)について研究する。

- (4) すべての教師が授業を公開し、「教師が何をどう教えたか(指導法)」ではなく、「生徒が何をどう学んだか(生徒の学びの事実)」を視点に授業を観察し、生徒の固有名で具体的な姿を全員が述べる授業リフレクション(研究協議)にすることにより、教科の壁を越えて「授業力(教師力)」を磨き合い、同僚性を構築する。
- (5) 生徒と向き合う時間や教材研究の時間を確保し、多忙感を軽減するため、週時程や学校行事・会議等を見直し、工夫・改善を図る。

4 研究方針

- (1) 学校教育目標及び本年度の重点目標を全職員で共通理解し、目標達成のために研修を行う。
- (2) 校内研修と学力向上の推進が連動して実践できるようにする。
- (3) 全国学力状況調査、沖縄県到達度学習調査等の結果を分析・考察し、該当学年における課題を焦点化し、日々の授業に生かす。
- (4) 授業参観者は、割り当てられたグループの生徒の発言やつぶやき及び行動を観察し、授業における「生徒の学びの事実」を全員が述べる。
- (5) 経年研修以外は、授業デザインシートを作成し、すべての教師が年に2回以上、授業を公開する。
 - ①全体研修：年3回実施(村・教育事務所の指導主事を招聘し、各学年代表による授業研究を全職員で実施する)
 - ②自主公開授業研究会：年1・2回実施(「学びの共同体研究会」スーパーバイザーを招聘し、全学級の公開授業と1学級の提案授業及び授業リフレクションを公開する。)
 - ③学年研修：月1回程度(各学年同じ日に授業をずらして実施し、放課後学年毎に授業リフレクション(研究協議)を実施する)
 - ④個人研修：適宜(校長、教頭、授業のない教師による授業研究を実施する)
 - ⑤研修報告：各種研究会や自主公開授業研究会へ参加した後、A4一枚程度で報告

6 研究組織図



7 研修計画

回	月 日	研 修 内 容	担 当 者	招聘指	主事名
				教育事務所	教育委員会
1	4月 4日 (木)	学びの共同体について	宮城 尚志		宮城 尚志
2	4月16日 (火)	特別支援教育について	泉川 良範		
3	4月24日 (水)	全体研修① (3年社会科)	渡慶次 靖		
4	5月 9日 (木)	学年研修① 1年：音楽科 2年：数学科 3年：国語科	各学年代表 津波古 健 波照間香織 佐藤 繁		
5	5月24日 (金)	自主公開授業研究会 3・4校時：全学級授業公開 5校時：国語科提案授業	6学級×2 佐藤 繁	佐藤 学 (学習院大学教授)	宮城 尚志
6	6月12日 (水)	学年研修② 1年：理 科 2年：英語科 3年：社会科	各学年代表 稲嶺 尚幸 比屋根 渚 渡慶次 靖		
7	9月 5日 (木)	学年研修③ 1年：国語科 2年：技術分野 3年：理 科	各学年代表 伊芸 正乃 東江 敏也 吉武 佳穂		
8	9月19日 (木)	全体研修② (2年道徳)	松田 直人	千葉 康成	宮城 尚志
9	10月23日 (水)	学年研修④ 1年：家庭分野 2年：保健体育科 3年：数学科	各学年代表 與那嶺紀子 比嘉 司 神山 康平		
10	11月29日 (金)	県・村指定研究発表会 5校時：全学級授業公開	研究主任 6学級	渡具知久浩	宮城 尚志
11	1月29日 (水)	校内研修のまとめ	研究主任		

8 具体的な取組

(1) 生徒との対応を変える

- ① 教師のテンションと声のトーンを下げて対応する。
声の小さい生徒、弱い生徒への配慮し、小さい声でも聴き合えるようにしたい。
深い沈黙と思考のあるしっとりとした授業を目指す。
- ② 教師が一方向的にしゃべらない。(教室の声→教師20%, 生徒80%)
教師の仕事は「聴く・つなぐ・もどす」+「ケアする」に徹する。
教師の発信から受信へ、「教える」から、「気づかせる・考えさせる」発想への転換
- ③ 教師はゆっくりしたテンポで話す。教師の発問や生徒の発表後の「間」を大切にす。

「じっくり待つ」とは…しっかり考えさせる「間」を与えることである。

- ④ 生徒とのかかわりを柔らかくしてじっくり対話する。
生徒のつぶやきや、顔の表情まで見取りたい（「何か言いたそう」の支援）
- ⑤ 生徒を怒って統制しない。大勢の前で一人を怒らない。（個の尊厳）
放課後や休み時間等に、個別にゆっくり静かに過ちを悟らせたい。

(2) 学習形態の配慮「コの字」型の机配置、「グループ活動」を位置づける。

- ① 「コの字」型に配置することの意義
 - ア 教師も、生徒同士も学級全体の各々の表情を見取りやすい。
 - イ 生徒が互いの意見が聴きやすい。（仲間の意見や考えを聴くための机配置である）
 - ウ 教師と生徒の距離が縮まりつぶやきや、生徒の困り感に対応しやすい。
- ② 「小グループ活動」を位置付けることの意義
 - ア お互いの考えや意見のすり合わせの場として設定する。みんなの考えを一つにまとめる活動ではない。
 - イ 一斉授業では発表できない生徒でも、近くで小さい声で話せる機会として設定する。特に弱い生徒への配慮である。「分からない」ことを聴ける雰囲気づくりを大事にする。
 - ウ 机の高さは可能な限り統一する（イスで高さ調整）。机は隙間なくくっつける。
男女混合の編成にする。机の横には物を提げない。グループ間の距離をおく。
 - エ 学びが停滞しているグループ、学びから外れているグループへ積極的に支援する。

(3) まずは、「聴き合う学級づくり」に取り組む

- ① 生徒同士が、互いの話を聴き合う雰囲気や学級内につくる。『聴く作法』
- ② まずは、話の聴き方の手本として教師が生徒の話を「眼」「体」「心」でしっかり受けとめて聴く姿勢を示す。生徒の発表途中に決して口を挟まず、すべて受け入れる。
- ③ 生徒の目線に合わせるために、教師の姿勢を低くする（イスに座る）。声の小さい生徒やつぶやきには、教師が寄り添って聴いてあげる。
- ④ 困っている生徒が他者に依存しやすい雰囲気をつくる。
「わからない」「教えて」「意味分かん」が日常的に言える（認められる）ようにしたい。

(4) 授業研究

「学びの共同体」にもとづく授業研究とは、優れた授業づくりのための理論や技術の習得を目標とするのではなく、一人ひとりの生徒の学ぶ権利を保障し、高いレベルの学びに挑戦する機会を実現させる教師の専門性を高めることを目的としている。授業の中では、生徒達一人ひとりが教材や教師や仲間達とどのようにかかわり合いながら学んでいたのかを多角的に省察する。

学びの場としての授業研究会の目的（佐藤 学）

- 1) 他者の授業実践や生徒の学習の様子から学ぶ
- 2) 自己の授業実践を振り返る
- 3) 同僚とともに学校が志向する授業のヴィジョンを共有する

- ① 『対話』と『協同』のある学びの授業スタンダードを日々の授業改善に活用する。
- ② 公開授業・授業リフレクション（研究協議）のねらい
すべての教師が授業を公開し、「教師が何をどう教えたか（指導法）」ではなく、「生徒が何をどう学んだか（生徒の学びの事実）」を視点に授業を観察し、生徒の固有名で具体的な姿を全員が述べる授業リフレクション（研究協議）にすることにより、教科の壁を越えて「授業力（教師力）」を磨き合い、同僚性を構築する。
- ③ 授業研究の方針
 - ア すべての教師が授業を公開する。
 - イ 授業者は、授業デザインシート（裏面に座席表）を作成し参観者へ配布する。
 - ウ 授業後のリフレクション（研究協議）に重きを置く（指導案作成など、事前に余分なエネ

- ルギーを注がない。同僚は授業についてアドバイスを求められたら必ず相談にのる)。
エ 校内研修のテーマを意識した授業の構築にこだわる。
オ ビデオに収録し、授業の検証に役立てる。
カ 見せるための「すごい授業」でなく、日常の授業の公開を心がける。

④ 授業リフレクション（研究協議）の方針

- ア 参観者は、割り当てられたグループを中心に生徒の表情やしぐさ、つぶやきや他のかかわりの様子など、観察したことや授業を観察して学んだことを語り合う。
イ 参観者は、生徒の固有名（名前）を挙げて、「どこで『学び』があったか。どこで躓きがあったか。」など授業リフレクション（研究協議）の視点を踏まえて観察したことを話す。
ウ 優れた授業の追求ではなく、一人ひとりの生徒の学びを成立させることとその質を高めるために、生徒一人ひとりの学びの事実に対する教師の対応（聴く・つなぐ・もどす・ケアする）のあり方について省察する。
エ 形式的な文言や美辞麗句はさける。何も語らないのは授業者に失礼である。

⑤ 授業リフレクション（研究協議）の流れ

- ア 授業者コメント
- ・ねらい、うまくいったこと、苦労したこと、困ったこと
- イ 担任からクラス状況の説明
- ・全体像、気になる生徒、がんばっている生徒
- ウ 授業に関しての協議
- ・生徒の学びの事実を語る、生徒同士のつながりを語る、ジャンプ課題の質を語る。
- エ 自由発言
- ・授業を見て学んだこと、生徒の学びの良さ、気になるグループ・生徒の学びの姿

9 参考文献

- (1) 佐藤学著「学校の挑戦」「教師達の挑戦」「教師花伝書」（小学館）
- (2) 佐藤雅彰著「公立中学校の挑戦」「中学校における対話と協同」（ぎょうせい）
- (3) 大瀬敏昭著「学校を創る」「学校を変える」（小学館）
- (4) 田中耕治編著「パフォーマンス評価-思考力・判断力・表現力を育む授業づくり-」（ぎょうせい）